

### ニコ☆プチ スタイリスト

## 青木麻衣子 を直撃!!

4月の「集まれ! おしゃれキッズ」から始まったファッションQ&Aのコーナーで、みんなの質問に答えてくれるスタイリストの青木麻衣子さんを紹介します。



小学生のファッションのポイントは?

スタイリストの仕事はどのくらいやっていますか?

アシスタントで8年ほど働いた後、独立して8年になりました。ニコ☆プチを中心に、ベビー・子供服のコーディネートをしていきます。私に2歳の子もいます。今は子ども服の仕事が中心です。

子どもならではのコーディネートに、大人の流行を組み合わせてくれるのが面白いですよ。この春はパステルカラーも、みんな上手に取り入れています。新しいファッションを提案してもみんながついてきてくれるので、やりがいがあります。

この仕事の楽しいところは?

私のコーデで、子どもたちの写真がかわいく仕上がりが、雑誌に載った時が一番うれしいです。モデルのお子さんたちもみんなおしゃれで、かわいいです。

## 集まれ! おしゃれ cool! キッズ

スタイリストの仕事って?

雑誌をつくる人(編集者)と、新しい企画や特集の相談をしてから、子供服の各ブランドのプレスルームに服を借りていきます。実際にコーディネートをしてみるので、ここがセンスの見せ所。そして撮影に向かいます。撮影の前には服のアイロンかけや靴が汚れないように保護するなどして、終わるとまたアイロンをかけた後、元の状態に戻して返さないといけません。そうすると仕事は朝から夜中まで。服をそろえるのに、一日15軒くらい回ることもあって、体力も必要なんです。

## おらぼまってまーす

全身が分かる写真(プリントしたものかデータで)と、おしゃれのポイントを100字以内でまとめて、名前、ふりがな、住所、電話番号、学年、ほごしゃの名前を書いて送ってね。あて先は、〒380-8546長野市南泉町657 信濃毎日新聞地域活動部信毎こども新聞係、電子メールはt-chiiki@shinmai.co.jpへ。写真はなるべく縦で、背景がすっきりしている方がかっこよく見えます。一人でも友達と一緒にOK。裏面に名前を書いてください。

スタイリスト青木麻衣子さんが答えるファッションQ&Aコーナーへの質問も同じあて先で、聞きたいことをなるべく具体的に書いてね。電話番号を忘れずに。質問はペンネームでもいいです。

分からないことがあったら地域活動部(電話026・236・3110)へ電話してください。今回は5月12日にのせるので、5月1日までに送ってね。



長野県の小学生にひと言をお願いします。

ニコ☆プチには読者のからの手紙がたくさん来て、そこからいろいろ教わっています。おしゃれやダンスなど好きなことに熱中できていることを見て打ち込めることなど、頑張ってほしいです。質問もどんどん送ってね。



それが今のはやりなのオ...!!

## Hello 地域活動部のニューフェイス

### 忘れられない言葉 「答えなんて、ないよ」

みなさん初めまして。この4月から、こども新聞のデスクになりました西島拓也といいます。今回は、みなさんへのごあいさつをかねて、これからみなさんとどんな新聞をつくりたいかを、自分が小学生だったころをふり振り返りながらお話ししたいと思います。

ほくは今年で40歳! になりますが、自分が小学生のころ、新聞記者をすることに悩んで、想像できませんでした。

記者は、どちらかと言うと、どんな人にもものおじしたり、はずかしがったりしないで、どんどん質問しなくては行けない。その場にいることのできないみなさんに代わって、事実を伝えるのが役目だからです。

でも、小学生のころのほくは、そんな「新聞記者」像とはちがって、とても内気な少年でした。あとなのひとと話すことはあるが、クラスで先生に指されて意見を言うときも、心臓がどきどきして息が苦しくなりました。

「どうしたら、あんまり話をしたり、意見を言わないですむのかなあ…」なんて、まじめに考えたりもしました。

そんな自分が少し変わったのは、小学校5、6年生のころのことだったように思います。きっかけは、担任の先生から受けた授業です。

ある日のこと。先生は教科書にのっていない小説をプリントに刷って、クラスのみんなに配りました。作家・井伏鱒二の「屋根の上のサワン」という短い小説でした。

「サワン」というのは、主人公の「私」が保護した水鳥の雛に付けた名前です。深い傷を負って飛べなくなっていたサワンを、主人公は家に連れて帰って手厚く看護します。サワンは少しずつ回復し、やがて雛が運んで空をわたる季節になると、屋根の上のほつてかん高い声で鳴き始めます。

先生は授業で、「サワンはどんな気持ちで鳴いているのかな?」と問いかけてきました。「仲間とはぐれてさびしいんじゃない?」「お父さんやお母さんに会いたいんじゃない?」「もしかしたら、自由になりたい?」。ほくらはたくさんたくさん「答え」を出しました。

地域活動部記者 信毎こども新聞デスク にしじまたくや 西島拓也(記者17年目)

でも先生は、ほくらがいから「答え」を出しても、「若たちは本当に、それでサワンの気持ちが分かったかと思えているの?」と問い返してきました。何度も何度もそんなことが繰り返うちに、しびれを切らした男の子から「じゃあ、先生が考えている答えは何なの?」という質問まで飛び出しました。

すると先生は、顔をニコニコとさせて、こう言ったのです。「答えなんて、ないよ」

教室でこうしたりやりとりがあったことを、30年近くたった今もほくは忘れずに覚えています。なぜかな?と考えると、そのときの先生の言葉にはとても大切な意味がある、と思ったからです。

「サワン」の気持ちは?と考え続けても、結局「分かった」とまでは言えない。同じように、いつも会っている人のことをどこまで理解しているのか、とか、周りの世界のことをどこまで知っているのだろうか、自分に問いかけてみると、常に自分が頼りなく思えてきます。けれども、先生が教えようとしたのは、人の気持ちを想像し続けたり、周りの世界のことを知ろうと努力し続けることの大切さだったのではないのでしょうか。これらを生きるために、「本当にそれで分かったと言えるの?」と、繰り返し自分に「問い」を投げかけることが大切なんだと...

新聞記者をし始めてからも、あの時の先生の声のなかにこぼれまわっています。これからはみなさんと、信毎のこども新聞をいっしょに作っていきませんが、少しでもみなさんのなかに、新たな「問い」が生まれるようなお手伝いをしていきたいと思っています。どうか、よろしくお願いします。

◇◇◇

「屋根の上のサワン」は「昭和文学全集 10」(小学館)などで読むことができます。

